

旭川文学資料友の会

友の会通信 第19号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0004
旭川市常磐公園 常磐館内
電話 0166-222-3310
FAX 0166-222-3334
印刷・株式会社あいわプリント

平成二十九年

特定非営利活動法人

「旭川文学資料友の会」

通常総会を終えて

菅野 浩

平成二十九年通常総会は平成二十九年五月二十八日午後一時三十分から文学資料館企画展示室において開催しました。当日の会員数は一六五名、出席者二十二名委任状九十五名で総会は成立しました。

会長挨拶、来賓紹介挨拶の後、議長に竹内利一氏を選出し議事に入りました。

旭川文学資料館平成二十八年度事業報告では、○井上靖記念館との連携企画『井上靖芥川賞受賞「闘牛」から「氷壁」の頃』展、○『詩人佐藤比左良の仕事』サークル誌、今野大力と共に『展』、○『文学と歴史資料で綴る「旭川駅今昔物語」展』、○『劇団「河」と「河原館」の二十年』展など特色ある展示が注目を集め好評でした。

井上靖記念館では○『井上靖「流沙」の背景〜舟越保武の挿絵原画〜』展、○『井上靖

人と文学Ⅶ「天平の薨」執筆の頃』展、○『井上靖と西域紀行Ⅱ「敦煌」展』、○旭川文学資料館との共催企画『旭川文学資料館長 詩人東延江』展などのほか、朗読、文学講演会、文学講座、コンサートなど多彩な行事が組まれ好評でした。第五回井上靖記念館青少年エッセーコンクールは「先生」をテーマに全国から中学生の部四五〇作品、高校生の部二五九作品、合計七〇九作品の応募があり、最優秀賞各一作品、優秀賞各二作品、佳作各二作品、井上靖ナカマドの会賞各一作品を選定し、平成二十八年十二月十八日表彰式および審査委員長吉増剛造記念講演会を旭川グランドホテルで実施しました。

平成二十八年度決算報告、会計監査報告については異議なく承認された。

平成二十九年事業計画では、旭川文学資料館企画展として、○北海道旭川東高等学校文芸部『俳句甲子園を駆ける』五月九日〜七月二十九日、○第二十回文学資料展『所蔵資料展〜自筆原稿、写真、初版本、色紙、短冊〜』、○『生活資料雑貨展』、共催展として、○『第三十一回旭川詩人クラブ詩画展』、○『俳句結社「源流」五十周年記念俳句展』など注目すべき企画展示が計画されています。

井上靖記念館では『井上靖「愛蔵品展」』井上靖 人と文学Ⅷ「ローマオリンピックとヨーロッパ旅行」、『井上靖色紙展』、『西域井上靖の足跡をたどる』などの企画展、講座が企画され、他朗読会、講演会、文学講座、井上靖生誕一〇〇年記念講演会として長男井上修一氏の「王子と孤児」小説家井上靖の育てられ方」(六月十七日)、長女浦城幾代氏「父井上靖と私」(九月十六日)が企画されています。

平成二十九年事業計画、予算案については特に異議なく承認。

報告事項としては、職員の就業規則、給与規程、ハラスメント防止規程等を平成二十九年三月二十一日開催の平成二十八年度第二回理事会において改定議決し平成二十九年四月一日から施行した報告がなされました。

以上議事は全て承認され、最後に平成二十九年役員体制の報告があり終了しました。



旭川駅 今昔物語展を見て

汽車通学のことなど

石川 郁夫

僕と汽車との共同生活は、高校へ入学した昭和二十七年から三十六年までの約十年。石北線東旭川駅からの汽車通学が始まる。街から離れた水田の中に駅舎があった。隣の桜岡駅を出た列車が駅に近づいてくる姿が、汽笛と一緒に遠くから見える。通学生や通勤者は、競走するように駅に向かって走る。中には、下着のシャツ姿で、Yシャツ・ネクタイを手を走る強者もいた。改札係は、ハラハラしながら、駅長も全員が乗り終るまでなんとなく待つてくれている。そんな毎朝の汽車通学だった。列車はいつも満員、客車に入らず、デッキにギョウギョウ詰めのまま旭川まで立ち通すことが多かった。

高校を終える春、一番ホームでは東京の大学へ進学する同級生の晴れの出発を見送る、騒々しい喜びと悲哀の混り合った何日かが続く。かならずしも学習意欲のある者が進学した訳ではない。多くの学友が就職した。比較

的裕福な家庭の子供たちが、何の屈託もなく汽車で上京するのは、少しの哀しみを伴った。当時はまだ、上京は、今で言えば未知の外国に近い世界へ飛び出していくくらいの思っていたのだ。

そんな中、僕の生涯の相棒と呼ぶべき友人の青野武は、両親の反対を振り切つて、家出同然の状況で、役者になるために汽車に乗った。見送りは彼の母親と僕の二人。母親は息子に近寄ることもなく、柱にもたれて涙を流しながら、息子の残酷な旅立ちの姿から目を離さずにいた。鮮明に残る悲しい出立だった。

当時の旭川駅は木造。駅舎にトイレはなく、駅に向かって左側(東側)にモルタルの便所の建物が建つていた。裏に回ると貨物駅荷捌所跡の、人気のない長いホームがあった。荷捌所の倉庫を撤去した跡だったかも知れない。幾度か上級生に呼び出されて、挨拶をしないと態度がでかいとかで、説教されたり殴られたりした。当時はよくある一種の儀式だった。十年以上もたつて、そのことを僕に謝る人もいて、かえって申し訳なく思ったりしたものだ。

駅の右側(西側)に鉄道郵便局の建物があった。チツキを受付ける窓口があった。絵かきの菅原弘記が勤めていて、時々そこに顔を出した記憶がある。チツキと言つても、今の若い人には分からないだろうが、チツキとは手荷物の事で、それを汽車に託送して貰うことは、ごく当り前のことだった。

僕は、駅を降りて北門町の大学までいつも歩いた。降りるとすぐの一条八丁目に手荷物預所があった。ロッカーのない時代だったので、旅行者には必要な場所だった。その隣に確か弘文堂とか言う小さな書店——間口がせいぜい一間半くらい——で、まず立読みをする。続いて三条八丁目の富貴堂、四条八丁目の東京堂、そして八条七丁目のお菓子屋さんの所の文栄堂、旭橋を渡った旭町三丁目の北星堂と、立読みのはしごをして、だいたい一冊を読み終える。当時の書店では、もうそろそろ出て行ってほしい時には、ハタキを持つて、そばの書棚をパタパタする。そういう時は、そこでやめて、次へと移動する。幸せな良い時代だったと思う。



居酒屋でいぎたなく飲んで、十一時五十五分の終列車に乗り遅れることもよくあった。現在屯田記念館の建っている自宅まで歩いて帰った。線路のレールにのつけた首の気持ち良さは、今も忘れない。

石北線では、後に詩の同人誌仲間になった通学生や、女子学生だった東延江さんや山口敬子さん、詩人の小野寺与吉さん、作家の真崎晋吾さんなども、そこで知遇を得た。

殊に小野寺与吉さんは、僕の拙劣な詩に、原稿用紙二十枚の本格的な評を書いてくださった。"ちたらべ"の編集など、気が向けば石狩川堤防そばの新町のお宅へ押しかけて、あびるように酒を飲んだ。何も報いることが出来なかつたのに、終生可愛がっていた。駅と列車は、僕の十代半ばから二十代半ばまでの生活そのものだった。



旭川工業高校生徒製作の第三次旭川駅舎模型

「旭川東高校 俳句甲子園を駆ける」 展示に寄せて

展示作業を終えて

二年 佐々木 素美花

高校生の私たちが展示会に携わるという機会はなかなか無いため、今回このような経験ができてとてもためになりました。

展示の準備をしていて、自分たちの手によって会場が少しずつ出来上がっていくことに感動しました。初めに展示会場に着いた時にはまだ空っぽのガラスケースがいくつも置いてあるだけでした。それから文芸部の部員総出の急ピッチな作業が行われました。ケースの中にどのように展示物を配置するか、会場全体を良く見せるにはどうすれば良いのかなどを資料館の方に伺いながら、楽しく作業することができました。

また、展示の準備作業は担当した区域を仕上げるだけでなく、全体の進捗を見て自分が次に何をすれば良いのかを考える必要がありました。考えて動く力をつける良い練習になったと感じました。

句作について

二年 久木崎 葉奈

私たち旭東文芸部の部員は、高校に入ってから俳句を始めたという人々の集団です。そんな私たちが句作をするとき、どんなことを考えているのか、その一部をお伝えしたいと思います。

まず第一に、現部員に俳句のことをよくわかっていない者も一人もいません。よくわかっているながらも、良句を詠もうと部員一同鍛錬を重ねている日々です。ただ、良いものを作ろうと思いやつきになればなるほど、頭の中で作ったことが丸わかりなつまらないものができてしまいます。目の前にある物、または以前見たことのあるものをいかに新しい視点で、またどれだけ描写できるかということを考えながら私たちは句作活動を行っています。そのようにしてできたものを推敲して作品の



質をさらに高めたり、行き詰ったときには句集を読むなどして、私たちは日々俳句と向き合っているのです。

俳句甲子園への意気込み

二年 中島 未彩

旭東文芸部は十数年連続で全国大会へ出場させていただいています。昨年私たちはその歴史を途絶えさせないように、そして愛媛県松山市という舞台を夢見て札幌で行われた地方大会に挑みました。

しかし私たちは負け、全国大会への切符を他校に譲ってしまうことになりました。その後に行われた投句審査によって全国大会出場が決定しましたが私たちの心はどこか曇ったままでした。

そこで今回は地方大会で優勝をし、全国大会への切符を再び手にしたいと思います。そのためにも俳句の向上、デイベートの向上を目指して日々練習しています。

今年の目標は全国大会に出場し、松山の大きなステージで質の高い句、質の高いデイベートを皆さんにお見せし、良い結果を旭川に持つて帰ることです。部員一同精一杯頑張りますので応援よろしくお願ひします。

文学を通しての交流

二年 城田 有梨

旭東文芸部は、これまで数々の全道大会、全国大会に出場させていただきました。

特に、日本各地から数十校が集まる俳句甲子園や神奈川大学俳句大賞では、部誌の交換をしたり、個人の間でも仲が深まったりと、他校との交流が活発に行われています。

前年度俳句甲子園で対戦した福島県立磐城高校、愛媛県立宇和島東高校の皆さんとは、試合後も俳句についてお話しさせていただきました。また、沖縄県立浦添高校、開成高校などの方々の句会に参加する機会もありました。企画展に一部を展示していますが、皆さんの部誌もいただいています。

このように他校との交流に刺激を受け、日々の創作活動に取り組むことができるのは旭東文芸部の楽しみであり、強みです。今度も様々な高校の皆さんとの関係を築きながら、創作を続ける部でありたい、と思います。



これからの企画展

所蔵展にむけて

(八・十五〜十・十四)

歌人松田一夫の偉業

旭川歌人クラブ会長

石山 宗晏

平成27年逝去された歌人松田一夫は(以下敬称を略する)、満103歳の天寿を全うされた。

このような長寿者は、これまでの旭川歌壇に例のないことであろう。身近なところでも中山勝83歳、鈴木淳一86歳、木村隆80歳などと比べても、いかに撰生されたか納得がいく。

「〇〇君、煙草はよくないよ」

この一言は、歌人クラブ役員会などで松田が発する忠告であった。若い時から酒、煙草をやらず極めて堅実な生活を心がけたとも伺ったことがある。

私は、まったくの井の中の蛙で旭川歌人クラブに入会するまでは、松田との接触がない。もちろん中央歌壇の知人もいない。そのような視野の狭い人間が、松田について述べるに適切だとは思わない。だが、以前まとめたことのある「旭川歌壇百年史」などにおいて、彼が短歌に接近した経緯や平成17年の

「旭川歌壇」にかかわる講演などをつかがつて、実に身近な存在に思われた。

93歳の講演のために緻密な資料を用意され、昭和初年の旭川歌壇の実態をお話された。その話の中に実に多くの歌人が網羅されていて、別表の人名録がプリントされていたことが印象深い。実に壯者をしのぐ気魄のこもった講演であった。この講演記録は『旭川歌壇』No. 7として記録されており、今日なお第一級の資料として精彩を放っているのである。

その講演の中で、北原白秋の高弟で旭川が生んだ歌人酒井廣治との出会いが彼の短歌一生に強い影響を与えていることは明らかだ。常に酒井と行動を共にしていたのであるが、酒井没後にいたって宮柊二のコスモス短歌会で指導を受けることとなった。ここでもその歌業が認められコスモス賞を受賞している。平成19年に旭川文化功労賞を受賞した折の喜びの言葉は、印象深い。

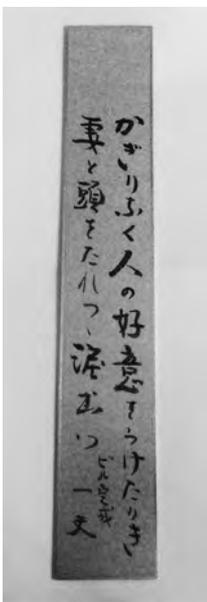
長い間コスモスに投稿しながら休詠しないように務めていたが80歳を過ぎてある



日、突然盛り上がる意欲が湧いてきた。このままでは埋没してしまう。今までの努力は何であったのか、初心に帰って頑張ろう、そう思ったとたん、ものすごいほど体と心に力が漲ってきた。今まで想像もしなかった100歳まで生きるための具体化にかかった。古い住宅を勉強しやすいように改造した。生まれて初めて自分の部屋を持ち、いつでも勉強できることは、最高の幸せである。

私の師コスモス短歌会創立者の宮柊二は常に短歌は人であり心であると教えられた。そして歌は生の証明であり、人間として真面目に生きる道標と思っている。私は満95歳の人生を完全燃焼した思いである。天災地変のない人情豊かな街に住む幸せを享受出来て感謝感激である。

以上の短文の謝辞からは、これまでコスモス誌上に勤勉に短歌を出詠してきた自信がみ



なぎっている。加えて身心の摂生と短歌によって培った強靱な精神、いわば、これは師匠の短歌哲学が滲み出たものといってよい。満95歳にいたってなお100歳に向かう人生設計をなそうという気魄には驚きを禁じ得ない。そして、実業家として、また歌人としての彼を温かく包んでくれた郷土旭川。その風土と人々の温かさへの感謝の思いは、松田短歌の中核であった。

師の宮柊二と松田は、その生年が1912年と同じであったが、宮は1986年に亡くなっているから74歳の生涯であった。松田は宮より29歳も長生きしたことになる。宮は名著『短歌に見る人生』に、白秋同門の酒井廣治(昭和31年没、63歳)への追悼文「かなしみを越えて戦いの」を載せている。先にも述べたように酒井は青年期の松田に深い影響を与えた歌人である。二人の恩師を失って松田の胸中を去来するものは、どのような思いであっただろう。察するところこの謝辞と無関係なものではなからう。

松田一夫の短歌(抄)と歌集

マイナス四十一度の朱鞠内

ダム工事の人あまた死す

連行と拉致の差あれど

日本が過去に犯せし悪事忘れず

八千の老若男女童まで

歩くスキーはよき友つくる

傘寿まで歩くスキーに親しみし
記念の写真いくつも掲ぐ
生まれし日の汝の温もり思い出づ
六十歳の亡骸に触れ

眼の見えぬ妻と拾へる子のお骨
体の割に足指細き

吾と妻の米寿傘寿に宮さんは
全力の愛と祝ひくくださる
涸谷の岩場に生えし穂芒の

一本そよぐそれだけの秋
優佳良織真紅のネクタイ目立つから

北の一夫のトレードマーク
鶴ならぬ百人の脚がゴンドラの
床を踏まへて空中に浮く

歌集「き花凍む街」より

昭和52年(1977)

第1歌集「鮭のぼる町」発行

平成2年(1990)

第2歌集「鹿越の径」発行

平成11年(1999)

第3歌集「一撞の鐘」発行

平成16年(2004)

第4歌集「き花凍む街」発行



『第三十一回旭川詩人クラブ 詩画展』について

(十一月一日〜十二月十六日)

旭川詩人クラブ事務局 立岩 恵子

当会は「クラブ」と命名するだけあって、各人個性豊かな集団であり「詩画展」はその最たるものですが、近年は一篇だけは共通のテーマで書く事にしています。昨年は「旅」その前は「川」「河」、今年は「橋」です。旭川は川の街で、すてきな橋が沢山あります。また、ふるさとや旅先の、心の、人と人の、夢の橋とか、色々ありそれらが一堂に会するおもしろさを、個性の個人コーナーと合せてお楽しみいただけたらと思います。ぜひ、ご観覧くださいませよう、お待ちしております。期間中には恒例のイベントを開催いたしますので、この日にも、ぜひ、お出かけください。

★講話と「詩と遊ぼう」

十一月七日(火)午後一時三十分より

旭川文学資料館 第二展示室にて

「講話」は、当会の副会長・『青芽』同人の、森内伝さんです。

「詩との出会いから『ななかまど』のあたり」と題して、樺太から引き揚げてきて体ひとつ

で江丹別に入った御一家と、病弱な子供であった森内さんのご苦労、やがて小児結核になり、詩と出会い、「青芽」の会員となり…。昭和四十七年、森内さん三十五才の時『ななかまど』を主宰として発行。その頃の若者の思いや、旭川詩壇の様子など、お話し下さいます。ひとりの詩人の原点、原風景、それは昭和史でもあります。ぜひ、お聴き下さい。お待ちしております。



「文学資料館企画展」展示室

生活雑貨資料展

(十二月二十六日～二〇一八年二月二十八日)

生活雑貨資料について

百井昌男

文学資料館の企画展ではいつも展示の機会を与えていただきありがとうございます。

今回の展示は何にしようかと考えるのは楽しいことです。何でも興味を持って集めているだけですが、そのほとんどが生活資料として利用されているものであり、深く考えずに生活雑貨というのはどうでしょうかと、言ってしまったが、生活雑貨とは何かと調べて見ると、日常の生活で使うこまごまとした品物とあり、よく考えるところの範囲の広さはどうしたものかと、あまりむずかしく考えないようにと考えたが頭の中はいろいろな物が次から次と浮かんでくる。雑貨資料というのだから今の物ばかりでなく、戦前戦後のものでもいいのではないかと、懐かしい物・面白い物・楽しいと感じる物まで何でもありの展示にしようと考えたがどうしても雑貨という言葉が気がなり行詰まってしまった。さらにいろいろ考えていると日用品とは何かと調べて見ると、これもまた日常の生活で使うこまごました品物とあり、生活雑貨と日用品とは同意語であった。どうしても雑貨という言葉が

気になるが、時代とともに生活が向上し毎日の生活が便利になってきている。その歴史を少しでも感じさせる様な展示が出来ればと考えた。

この様な展示は身近すぎてもあまり例がないのではないかと、ただ楽しみで何でも保存してあるだけでこの様な機会に展示できることは嬉しいことである。文具・玩具を中心に旭川に関係のある資料や広告があってもいいのではないかと、ほかにマッチ・うちわ・割ばし・タバコ・ラーメン・飲料・等々なんでもあってもいいのではないかと。早速資料集めにとりかかろう。



- ・生活……生存して活動すること。生きながらえること。世の中で暮らしてゆくこと。
- ・生活資料……生活に必要な物資。
- ・雑貨……こまごまとした日用品。
- ・日用品……日常の生活で使う、こまごまとした品物・物品。

「来館者ノート」から

坂井京子

「手作り感がすばらしいと思います。見応えがあつて貴重なスペースとして大切にしていきたいと思います。旭川市の一つの宝として若い人々に受け継がれていくことを祈っています」 (片山晴夫、礼子)

「素晴らしい展示に驚きました。小樽文学館にはよく行く者ですが、それに迫る、あるいはそれ以上のものができましたね。皆様、ありがとうございます」 (宮川達二)

「すばらしい文学資料館を見学出来まして有難うございました。私は第十七回小熊秀雄賞の小坂太郎の妻です。夫が受賞しました時丁度中学校合併で最後の中学三年の修学旅行とかちあい出席出来ずに残念がつていました。でも今回、息子家族と訪れることが出来ました事は、大変嬉しく思います。東延江様とご連絡がつき、日曜日にもかかわらず開館して頂き本当に感謝しています」 (小坂丸子)

「旭川が生んだ文人にふれて良い研修となった。特に小熊秀雄の文学賞など、古くより続けていることに感心しました」

(函館・高橋)

「小熊秀雄の机を見て感激しました」(瀬戸)

「はじめて当地の高田雍介氏のご案内で訪

れることがありません。喜びです」

(東京池袋モンパルナスの会長・玉井五一)

・「五十嵐久弥氏の獄中より今野氏への肉筆のハガキ、何十年ぶりで見ると懐かしさ目がある」
(旭川・司郁)

・「五十嵐久弥の書簡集に心打られました」

・「初めて訪れました。市内在住ながらこんなに立派な資料館があるとは知りませんでした。資料は市民の宝です」

・「沢山の本物の資料が収集、展示され、その多くを閲覧可能なこの資料館の意義は大きいと思う。今の時世、こうした資料館の維持、管理には、大変なご苦労があるうと思えますが続けて欲しい。旭川の文学史や人物全体の流れが解る表のような資料があると、初めての人にも解りやすいのではないかと思った」
(滋賀県・洋平)

・「丁寧な陳列、多くの資料があり驚きました。館の方の対応も温かく感謝しています。このような施設の維持には苦勞も多いかと思いますが、是非ともこれからも」
(岐阜県・内山)

・「日曜日に来館しましたが休館でした。夕方に来た時も十六時閉館とのこと、三回目です。すばらしい文学資料館なので、せっかくなので来てくれた方が見れるよう、日曜開館を望みます」
(有馬)

・「はじめて訪ねましたが、旭川にも数多くの文学があったことを初めて知りました」
・「孫とピクニックに来て寄りました。旭川

に住んでいて足を運んだことがありませんでしたが、旭川の歴史に触れることが出来、穏やかな時を過ごすことが出来ました。ありがとうございました」
(涼子と凜香)

(涼子と凜香)

・「中央百寿大学の皆さんと来ました。授業で来て色々説明を受け感動を受けました。駅には石川啄木の歌碑もあり、先日新聞にも載っていたので、とても身近に感じる事が出来ました。市民から戴いた資料、ボランティアの人々ですべて運営していると聞き頭が下がります」
(旭川・大橋)

・「こんなすばらしい作家の方々の作品が見れてよかったです」
・「川柳や文学サークル誌や短歌などが沢山あり、すばらしく、もつと本など増やして欲しいと思います」
(齊藤)

・「市内在住なのに初めて来ました。こんな施設があることをもう少し市民にPRすべきです。今度もう少しゆっくり来たいと思う」
(今)

・「今回初めて訪れました。公園の中、川のほとりに位置し静かな所に沢山の資料があつてびっくりしました。ゆっくり過ごし、旭川ゆかりの文学者の精神の影響を受けて帰りたいと思っています」

リレーエッセイ

新しい世界で一年

近藤 初美



今まで、不勉強で足を踏み入れたことのなかった文学資料館に、毎週通うようになってもうすぐ一年になります。昨春退職して旭川市民になり、十河先生に声をかけていただいたのが縁です。慌ただしく時間に追われていた教員の頃には、このように静かな、豊かな時間をもてる生活になるとは想像もできませんでした。

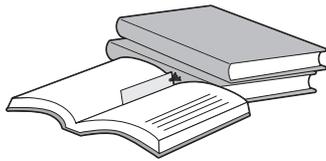
緑豊かな公園の一角にある建物は、地階、一階、中二階、二階、三階があつて、近道のような迷路のような空間が広がります。色鮮やかな本が並んだ図書館の本棚とは違う静かな展示室の佇まい。まるで時間の流れが外の世界とは違うようなこの資料館の雰囲気は、しかし、どこか懐かしさ親しみを覚え、ああ、これは図書館のようだと思えます。教員時代に務めていた学校の図書室ではなく、もつとずつと昔、自分が子供だった頃の図書室。手が届かない高さの棚まで、自由に読んで

いいと言われた沢山の本。三月が近づくと、お雛様が飾られていた小学校の図書室。

まだ誰も来ていない放課後。本棚の背表紙を眺めながら、ここにある本の著者は、ほとんどがもうこの世にはいないことに不意に気づき、この部屋はまるで納骨堂のようだと感じた中学校の図書室。

百年、千年も前に、自分と同じように感じ、考えた人がいたことを知る驚きと喜び。時間と空間を超えて魂は出会うこともできるのか、などと思っていた高校の図書室。

あの頃、本はこの先もずっとあるものとして信じて疑いませんでしたが、その形態は紙からデータへと、大きく変わっていく流れがあります。完成して出版された作品だけでなく、作家の短冊や原稿等の直筆資料、時代背景や交遊を伺わせる貴重な写真など、唯一無二の資料が収蔵されている文学資料館の価値は、今後、ますます重要になることと思います。



いまこそ「銃口」再読

三原 一 仁



三浦綾子の「銃口」は、いままた読むべき一冊である。

昭和十五年十一月、道内各地の小学校教師が治安維持法違反の容疑で検挙された。これが北海道級方教育連盟事件のはじまりである。この事件は教育事件ではなく、思想事件としてデッサン上げられた表現の自由に関わる弾圧事件だ。

「生活綴り方とは単に生活を見たまま綴るのではなく、生活者としての子供が自然や社会と人間のしくみをとおして、自己を確立し、変革していく証」としての教育活動だが、それを当局は「生活主義綴り方とは、児童をして生産労働部面に着目せしめ、悲惨なる生活現実を認識せしめて、これを表現せしめることにより、社会機構の諸矛盾を発見せしめ、階級意識を培い、もってこの機構変革の素地を育成し、(中略)培養することを目的とする」(昭和十八年九月の文部省極秘文書「生活主義教育運動の概観」)との詭弁を弄して、不当検挙と冤罪をデッチ上げた。

しかも驚くのは、「治安維持法違反」ということにするためには共産主義者の団体であるということにしななければならない。しかし、

それを現実に綱領などに示さなければ、彼らの頭の中や肚の中にあつたところで、問題にするのは無理」(「特高の回想」)という特高刑事の証言である。

昭和十五年から十六年にかけて検挙された小学校教師は、連盟結成に関わった十六名を含めておよそ五十人。だがこの先の近未来、「治安維持法」でも無理だったという頭の中や肚の中を探られて検挙投獄されるのが「共謀罪」ということだろう。

治安維持法下の文学に対する弾圧が、小林多喜二のみならず小学生の詩や作文にもおよんでいた事実は、もとより市井の老若男女の文芸にも暗い影を落としていたはずだし、むしろこれからの時代、私たちは小学校の作文指導や一般の文芸活動にも翳りがないかを注意深く見ていく必要があるであろう。

平成二十九年年度 役員体制

顧問	相川 正志	理事・旭川文学資料館副館長	西勝 洋一
"	井内 治弥	"	"
"	北見 弟花	"	"
"	木原 直彦	"	"
"	坂本 夕カ	理事	荒川 美知
"	菅沼和歌子	"	片山 晴夫
"	東郷 明子	"	坂井 京子
"	富田 正一	"	白井恵理子
"	菅野 浩	"	立岩 恵子
会長	石山 宗晏	理事	水戸 壽代
副会長	十河 宣洋	"	森内 傳
理事・旭川文学資料館長	東 延江	監事	阿部 清
		"	石川千賀男

資料館だより

資料館の母体でもある友の会(旧研究会)が発足して十六年、文学資料館開館八年となりました。

昨年は展示用パネルを作ることが出来、念願の展示室のリニューアルを終え、来館者から文学館らしくみやすくなったとの声にほっとさせられています。更に何よりも嬉しいことに資料整理のボランティアが五人も加わってくれたことで、その力を得て、今年度から、西勝洋一(展示担当)、十河宣洋(会報担当)を中心に、ボランティア・会員たちが加わり態勢を整えました。

来館者が何度でも訪れたくなるぬくもりのある館をめざしていきたいと思えます。

資料館には貴重な資料、著書、雑誌等が寄贈されています。全部を書き出すことは紙面の都合で出来ないのが残念ですがご報告申し上げます。



平成28年9月15日発行
松田光春 著

受贈資料

(二〇一七・一〜同・五・未、一部二〇一六分含む)

- ・松田尚樹 軸装二 酒井廣治・今村寛、短冊 北原白秋・村野次郎・木俣修他、宮柀二歌集他単行本、歌集、雑誌他
- ・中村洋一 写真集『北大百年』、『帯広畜産大学五十年の歩み』、中村洋吉歌集『夏雲』他、単行本、雑誌等
- ・高橋三枝子 女性史、民衆史、旭川関係、道内・道外発行の単行本、雑誌、北海道開拓記念館、その他の資料集、カタログ・機関誌等多数(一部は第一展示室の書棚において誰でも手にとつて読めます。)
- ・ケールテレビ CD「郷土の文学」五回分
- ・辰巳奈優美 句集「氷絃」
- ・朝倉奈々子 朝倉大柏川柳句集『風塵抄』
- ・横川敏晃 井上靖作品掲載雑誌他、雑誌、全集、単行本
- ・冬木美智子 詩集『しずかの海』
- ・大谷博 明治期の手書きの旭川市街図、アルバム
- ・松田光春 『昭和二十年―混乱の八月十五日から八月三十一日まで』
- ・岡和田晃 「文学研究論書」「未来」「破滅の先に立つ」
- ・山田亮太 (今年度の小熊賞受賞者) 同人誌
- ・放送大学 『日本語大辞典』十巻、『大漢和辞典』十四巻、『外国新聞に見る日本』

十巻、『廣漢和辞典』四巻、『昭和ニユース事典』二十六巻、『国史大辞典』十七巻、『世界歴史大事典』他、種々辞典六冊

・井川美和子 (歌誌「新墾」所属だったお母さん近藤富貴子蔵書の寄贈) 歌集、旭川関係二十一冊、道内関係五十八冊、その他二十八冊

そのほか、各地文学館、記念館館報、俳誌、歌誌、詩誌、同人誌等、発行所、個人からたくさんの方の寄贈を受けました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向

(敬称略)

【新入会員】

中村洋一

【現在会員数】

一六五名(五月二十三日現在)

編集後記

夏至も過ぎ、公園の噴水も夏到来を喜んでいるようです。五月には総会も終了し、友の会は平穩に過ぎていきます。

今回旭川東高校の俳句甲子園での活躍を企画してみました。多くの方が見えられ高生達の活躍に目を見張っています。また、高校生の方の企画は珍しいということで俳句関係の方も注目しています。

今後の若人の活躍に注目していきたいと思えます。(宣洋)